

陸奥宗光の思想形成

—明治初期政治思想の一例として—

佐々木 雄一

- 1 はじめに
- 2 幕末の学問遍歴
 - (1) 幼少期
 - (2) 森鉄之助 (1813-1873)
 - (3) 安井息軒 (1799-1876)
 - (4) 水本成美 (1831-1884)
 - (5) 広瀬元恭 (1821-1870)
 - (6) 何礼之 (1840-1923)
- 3 諸テキストの検討
 - (1) 「商方之愚案」
 - (2) 慶応 4 年 4 月辞職願
 - (3) 「日本人」
 - (4) 「福堂独語」
- 4 おわりに

1 はじめに

本稿は、明治期の政治指導者、陸奥宗光の思想形成過程を、幕末の学問遍歴と諸種の意見書や論考の分析を通じて示すものである。陸奥は、国家形成期の官僚であり政治指導者であるとともに、検討に値するある種の政治思想を有していた。獄中で功利主義の祖、ベンサム (Jeremy Bentham) の主著である *An*

Introduction to the Principles of Morals and Legislation を訳し、『利学正宗』として出版した。その翻訳は、「極めて明晰暢達で頗る理会し易く、其の漢学の素養は訳文に一種の風趣を与へて居る。〔中略〕殊に一驚を喫したのは、開卷第一に「当為」といふ語の存することで〔中略〕 what we ought to do を既に「当為の事」と訳したことは私の今まで知らなかつたことである」（桑木 1943：186-187）、「ベンサム of 英文を正確に読みくたき、それを自家菜籠中のものとして表現している有様は、おどろくほどである」（萩原 1997b：236）、などと評価されている。同じく獄中では、三つないし四つの文章に勉学と思索の成果を書き記した。後にヨーロッパで学んだ議会や選挙、国制に関する知見も、大いに検討すべきものとみなされている¹⁾。

「伯は智力の輪転機なり。満身総べて是れ智力にして、其の道徳も、其の勇氣も、其の感情も皆智力を以て指導せらる」（鳥谷部 1909：107）との評もあるように、陸奥は、「智」と密接に結びついた政治家であった。藤田（2006：95）は、「〔陸奥は〕政治的精神の塊みたいなもので、政治的精神が着物を着たのが陸奥宗光というふうと言ったって悪くはないわけで、あらゆる教養も美的精神も全部そこへ結合されるんだから、政治学者はこれを分析しないでなにやっているとありますが」と指摘している。

ただ、思想史研究一般においては、宮村（2005）が西周と並べて陸奥のベンサム・功利主義受容について論じている以外では、陸奥の政治思想は本格的な分析対象になっていない。これは、陸奥がいわゆる思想家や知識人ではなく、自らの思想を書き記した論考も多くはないからだろう。しかし、本稿で取り組むように、思想形成過程の面から光を当て、また政治活動のなかで作成した意見書も含めて分析することも可能である。あるいは、政治的实践を検討することで、そこに表れる陸奥の思想を見てとることもできよう（佐々木 2018b 参照）。

1) 萩原（1973）、上野（1993）、高世（1997）、同（2001）、瀧井（2005）参照。陸奥のヨーロッパ遊学についても論ずべき点は多く、別稿を予定している。

他方で、陸奥研究においては、思想面も触れられることは多い。帆足 (1969) や上野 (1989)、萩原 (1997b) は、陸奥の獄中での勉学や陸奥及びその周辺でのベンサム・功利主義受容について、詳しく論じている。しかしながら、同時代の思想潮流や他の知識人との比較といった視点からの検討は、これまで十分になされていない。

例外は江藤 (1977) で、開国に伴って“利”の思想を抱いた者たちとして、勝海舟、福沢諭吉、坂本龍馬、陸奥宗光、星亨、高橋是清の名を挙げる。そして、「利」の思想を受容し、主張するとき、明治初期の日本人には、儒学の論理を利用する以外に、この新思想を把握する方法がなかった」と指摘し、例えば福沢の『学問のすゝめ』に関して、「一方で「実学」という新しい概念を掲げて「文学＝儒学」を否定しながら、その半面「……身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり」では、『大学』の「修身齐家治国平天下」に通じる儒学的な論法を用いている」とする (江藤 1977: 55-56)。そのうえで陸奥の「利学」理解について、陸奥自身の言も引きながら、次のように論じる。

「陸奥によれば、津田芝山は、『孟子』の原文を一字だけ変えた。つまり、「国危からん」を「国全からん」としたのである。そうすることによって「仁義」と「利」とを百八十度顛倒させ、儒学的価値構造から「利学」的価値構造への転換をおこなった。陸奥は前述の通り、「全章唯々一字を交換するのみ、而して真理躍然、死龍の蘇生するが如し」と評しているが、これは福沢の『学問のすゝめ』の例と同様に、儒学の枠組を利用して「利学」の精髓をうがったものというべきであろう (江藤 1977: 56-57)。

これは、津田出 (芝山) が、『孟子』 (梁恵王上) の「王曰何以利吾国、大夫曰何以利吾家、士庶人曰何以利吾身、上下交征利而国危矣」の最後から二字目、「危」を「全」と読み換えて見せたという話である。みな利益を追求すれば国は危うい、だったものを、一文字を変えることによって、みな利益を追求すれ

ば国は無事だ、と正反対の内容にした²⁾。そして上の引用文中にもあるように、陸奥はその津田の才知を、「全章唯々一字を変換するのみ。而して真理躍然、死龍の蘇生するが如し。真に鍛鉄成金の手、又以て達人達観といふべし」と称賛した（陸奥編 1929：35）。

この『孟子』中の一節に着目したのは、津田や陸奥だけではない。阪谷素は、西周がミル（John Stuart Mill）の *Utilitarianism* を訳した『利学』の評言において、梁恵国を利するの利、孟子仁義を為るの利、人分別に苦しむ、とその部分に言及し、『利学』を読むことでそうした「利」をめぐる疑問が氷解すると記した。西自身もそうした読解を読者に促そうとしたとされている（菅原 2009：146-147）。

陸奥は、イギリス帰りの星亨が獄を訪ねて来たとき、翻訳の原稿を示し、「どうぢや西周氏の訳書とは」と問うたという³⁾。西の訳業や功利主義理解を意識していたと見てよいだろう。陸奥は、同時代の日本の知識人が書いたものを読んでおり、また人生経験や問題意識においてそれらの人々と共通する部分が少なからずあるというのは、これまでの陸奥の思想研究で見落とされている重要な点である。

陸奥の思想に関してこれまで注目されてきたのは、ベンサム、功利主義、そして荻生徂徠である。上野（1989：41）は、陸奥のベンサム受容の内的環境として徂徠学の素養を強調し、陸奥は、徂徠を介してベンサムに近づいたと論じる。萩原（1997b：194）も、ベンサムの功利主義を理解する下地を陸奥に用意したのは、「山路愛山も指摘しているように、おそらく陸奥が身につけて

2) 津田は紀州の指導者で明治初年以降、陸奥と親交を結んだ。津田もまた徂徠学に親しんだ者として知られているが、それについて津田自身は、次のように述べている。「拙者は徂徠に私淑し居る者ですが、先頃或人が拙者を徂徠学者かと問ひましたから、拙者は常言を書て答へました。人謂予為徂徠学者、誠然、所謂先王孔子之道者、実定於徂徠、予亦由之得知其真相、但徂徠師仲尼、故不能出其窩窟、予友仲尼、其得失自判焉、是其異耳。随分自尊ですな」（「津田出翁」、『東京朝日新聞』1900年4月9日）。

3) 中島信行談。「福堂逸話」（『東京朝日新聞』1897年8月30日）。

いた徂徠学の教養である」とする⁴⁾。陸奥の思想に対するこうした見方は早くからあり、陸奥が最晩年に政治活動に利用した新聞、『日刊世界之日本』は、陸奥の死亡時に以下のように記している。

「陸奥伯漢学の素養、多く徂徠派にして、就中、弁道弁名の二篇は其最も嘆賞する所なりき。後年、国事犯罪人として獄に入るや、克己勉励、ペンタムの学説を究はめ其著書を訳し、「利学正宗」と号し之を世に公にするに至り、是より功利説の熱心家となり、其凡べての観察皆な此学説に基く。人あり曾て嘆じて曰く、学説の力もまた大なる哉、陸奥は全く功利説に擒にせられたりと」⁵⁾。

徂徠学の素養を土台として功利主義を理解・受容したという説明は、例えば西周に関しても見られる。しかし、まさにその西研究で徂徠、ミル・功利主義、西のそれぞれの思想の位置関係が問題とされているように、徂徠学の素養を土台とした功利主義受容というのは、より厳密に考える必要がある。徂徠学の素養とは何を意味し、またそれが功利主義の理解・受容の仕方にいかなる影響を与えているのか、といった点が示されなくてはならない⁶⁾。

本稿は、陸奥に関して徂徠学の素養を土台とした功利主義受容と言われているものは、江藤(1977)が明治初期に広く見られる傾向として説明しているように、幕末に得た儒学・漢学の知識を応用して西洋の思想を理解した、という以上の意味は有さないと考える。そして功利主義に関しても、たしかにベン

4) 山路(1893:123-124)は、荻生徂徠について次のように論じている。「[製作的の治術]を可否すべき標準を論ずるに至つては、彼れはペンダムの如く功利教に陥らざるを得ざりき。[中略]治術の正邪善悪を判断すべき第一の原理に至つては、彼れは毫も之を説かず。歸する所唯天下を安んずるに在りと云ふのみ。是豈ペンダムの最大福幸主義に符節を合する者に非ずや。彼れの眼中には唯天下泰平一最大多数の最大幸福一あるのみ」。

5) 「陸奥伯逸事(二)」(『日刊世界之日本』1897年9月3日)。

6) 西研究におけるこうした論点の検討につき、菅原(2009:204-211)参照。

サムの主著を訳してはいるものの、そこから新たに多くを学んだとは言い難い。陸奥は一つの体系立った思想を学ぶというよりは、現実の政治・社会に対する強い関心や問題意識が先にあり、そこに示唆を与えるような知見を求めている。それは、以下の本稿の検討を通じて明瞭になるだろう⁷⁾。

なお、陸奥が自身の政治的立場と結びつけて、あるいは政治活動に資するようベンサム・功利主義について学んだ、ということ自体は、帆足（1969）、上野（1989）、萩原（1997b）、宮村（2005）など先行研究で一般に指摘されている。本稿は、従来総合的に検討されることのなかった陸奥の幕末の学問遍歴と、政治・行政上の意見書類を含む諸テクストの分析を通じて、陸奥の思想におけるベンサム、功利主義、荻生徂徠の占める位置を相対化し、かつその思想を、明治初期政治思想の一例として捉えるものである。

本稿中、資料を引用する際は、旧字体を新字体に、変体仮名やカタカナをひらがなに改め、句読点を補うなどの修正を加えた。引用文中、（ ）内は原注、〔 〕内は引用者による補注である。引用・言及した文献のコロン（：）に続く数字はページ数ないし丁数を示す。

陸奥の伝記的記述は、特に断らない場合、佐々木（2018a）による。幕末の陸奥は何度も名を変えているが、まぎらわしくなるためすべて「陸奥」とし、必要な範囲で当時実際に用いていた姓名を記す。

2 幕末の学問遍歴

(1) 幼少期

陸奥宗光は天保15（1844）年7月、紀州和歌山で生まれた。陸奥の思想形成という点では、まず父の伊達宗広（千広）に触れておく必要があるだろう。

7) 自身の問題意識が先にあり、様々な人物から学ぶことで考えをまとめ上げていく様子は、後年のヨーロッパ遊学においても見てとることができる。前述の通り、それについては別稿で論じる。

伊達宗広は享和 2 (1802) 年生まれ。文化 13 (1816) 年に藩主徳川治宝の小姓として出仕したのを皮切りに、治宝や家老の山中俊信 (山中筑後守) に引き立てられて出世し、紀州の金融・財政の中枢を担う。

同時に宗広は、よく知られるように学問にも通じた人物だった。若き日に本居大平の門に入って以来、国学・歌学を学び、藩政中枢からの転落後はますます歌の道に傾倒した。また政治・行政の第一線で活躍していたさなか、嘉永元 (1848) 年に書き上げたとされる『大勢三転考』は、明治以前の日本有数の史論と言われる⁸⁾。

高い行政手腕や知的活動など、陸奥と父宗広との間に、資質の継承が色濃く見られるというのは、陸奥の評伝の多くが指摘するところである (渡邊幾治郎 1934、萩原 1997a)。ただ、宗広失脚以前の陸奥については、嘉永元 (1848) 年まで鳥居藤四郎という人物のもとで育てられたことを示す書き付け⁹⁾以外に資料がない。宗広のもとにいた時期にも陸奥は何らかの教育を受けていたはずだが、その実態は不明である。

嘉永 5 (1852) 年、9 月に山中俊信、12 月に徳川治宝が亡くなる。紀州内にはもともと勢力争いがあり、宗広は治宝の死の直後、その月のうちに失脚して紀州田辺にお預けとなり、跡目の伊達宗興も翌嘉永 6 年 1 月に改易となった。宗興は宗広の婿養子で、陸奥からすると義兄に当たる。

和歌山から 10 里外の地へと追われた宗興は、その後数年の間、紀ノ川上流で何度か居所を変えた。時期ははっきりしないものの、陸奥も母や妹とともにこれに合流したらしい。後年、新聞に、陸奥は伊都郡橋本の一色幸十郎 (小十郎の誤りか) 方で百姓奉公をしていたことがあるとの談話が載っている¹⁰⁾。そして一色家の子孫が家の歴史を記した私家版の本には、一色宗介 (東樹) とい

8) 伊達宗広の生涯と史論については、高瀬 (1942)、小沢 (1966 : 380-414)、丸山編 (1972)、松本 (1974) 参照。

9) 「陸奥宗光及同一族自筆書簡」所収。和歌山市立博物館編 (1997 : 11) に写真が掲載されている。

10) 「行雲流水記 (六)」(『東京朝日新聞』1899 年 8 月 6 日)。

う人物が伊達宗興以下総勢 13 名を養い、「長ずる者には復軒に就きて漢学を修めしめ、それぞれ教育を施されしと云ふ」と記されている。宗介の曾祖父が、宗家筋である小十郎の高祖父の弟である。同書によれば、一色宗介は、漢籍は和田復軒と「大和五條の某塾」、国学は「春信殿と同じく本居大平」に学んだという（一色編 1933：6-10、25-26）。

「春信」は一色宗介の父の勝蔵のことで、本居大平の門人である。陸奥の父宗広とは同門ということになる。大平の門人録には、宗広と一色勝蔵の名はあるが、一色宗介の名は記されていない。本居内遠の門人として、天保 10（1839）年に「一色」とあって、名の記載はないが「東城」と記されており、これが一色宗介のことかもしれない（本居編 1928 参照）。

和田復軒は堺の出身で、約 30 年間にわたり伊都郡東家で教えた。『春秋』に精通していたという（土屋 1917：4-5）。一色家の本は、伊達宗興の長男の安丸がその後安一郎と名を改め、復軒の嗣となったと記す（一色編 1933：26）。正しくは長男ではなく次男だが、たしかに、宗興の息子の名は安丸である（『紀州家中系譜並に親類書書上げ』）。そして「一色家文書」中には、1886 年 4 月 21 日付の、陸奥の和歌山来訪に関する和田安一郎宛一色小十郎書簡（控ないし写）があり、そこには「旧故を棄て賜はず、此破宅に宿せんと云ふ厚意」と書かれている。続けて収められている文書には、「和田氏来て曰く、已に和歌山に立越し叔父に面し」云々とある（「一色家文書」29④、同 29⑤）。安一郎の孫の周作は外務官僚になっており、外務省から研究生としてフランスに派遣されると報道されたとき、「祖父安一郎氏は外交界の偉人陸奥宗光伯の令弟」と正しくは弟ではなく甥だが、ともかくも陸奥と縁戚関係にあることが触れられている¹¹⁾。

以上の通り、陸奥を含む伊達宗興ら一行に関する一色家の記録は、多少の疑義や誤りはあるものの、概ね信憑性がある。したがって、陸奥はここで、和田

11) 「前例破つて三人 外務省の在外研究員 国際紛糾に備へて鍛へる卵」（『読売新聞』1938 年 3 月 31 日朝刊）。

復軒から漢学を学んだものと思われる。次に見る大和五條の漢学事情や森鉄之助についても、一色宗介から聞いていたかもしれない。

(2) 森鉄之助 (1813-1873)

紀ノ川上流を転々としていた伊達宗興ら一行は、最終的に安政 4 (1857) 年頃、伊都郡入郷村に落ち着く。そして陸奥は、大和五條の森鉄之助のもとで漢学を学んだ。

森鉄之助 (竹亭) は文化 10 (1813) 年、大和高市郡田井庄で生まれた¹²⁾。10 代の頃に大阪の篠崎小竹の門に入り、帰郷後、谷三山のもとで学ぶ。基本的には農業で生計を立てていたようである。後述の通り三山の高弟となるとともに、五條出身の森田節齋らと親交を結んだ。嘉永末ないし安政初めから五條の主善館で教授を務め、その後狭山藩に儒者として召し抱えられる¹³⁾。森の学問的事績については、土屋、佐々木 (2017) が唯一の研究である。

森の師である谷三山は、享和 2 (1802) 年、大和高市郡八木の生まれ。十代のうちに全聾となり、途中、猪飼敬所から学ぶことはあったものの、基本的には大量の読書を通じて独学で学問を深めた。家塾の興讓館で多くの者に教えたほか、高取藩に藩儒として仕えている (大伴 1936、大月 1981、谷山 2017)。

その三山は、高取藩の築山愛静への書簡において森のことを、「古書を研究いたし、字義訓詁に明なること、他国は知らず、京阪に敵手なからんと存候。文章は森田謙蔵 [= 節齋] の俊逸に及ばず候へ共、又精密これに勝るところあり」と評している (奈良県高市郡教育会編 1917: 43)。弟子の推薦という趣旨があるため多少割り引いて読むにせよ、三山が森を高く評価していたのは間違いない。嘉永 6 (1853) 年、吉田松陰が森田節齋や三山、そして森のもとを訪れており、松陰は森について、「三山之高足弟子也」と記している。松陰と森

12) 高市郡越智の生まれとするものもあるが、総合的に見て田井庄出身と書いた資料の方が説得力を感じる。土屋、佐々木 (2017: 48, 58) 参照。

13) 「森鉄之助履歴」(「品川弥二郎関係文書」1524)、奈良県庁編 (1909: 691)、大阪狭山市史編さん委員会ほか編 (2014: 421-422)、土屋、佐々木 (2017: 48-60)。

は、『孫子』の訓誥などについて論を交わした（吉田 1883：19-21、土屋、佐々木 2017：51）。

森の周囲では、揺れ動く時勢に対して敏感に反応する様子が目立つ。師の谷三山は、嘉永の頃から対外問題や西洋諸国について強い関心を持って学び、文久・元治期には尊王攘夷の趣旨の意見書を何度か提出している（大伴 1936、大月 1981、谷山 2017）。他方、森の五條での門人である乾十郎や井沢宜庵は、文久3（1863）年に五條で起きた尊皇攘夷派の武力蜂起、天誅組の変に参加し命を落とした。森田節齋にも師事した乾は、尊皇攘夷活動に身を投じて東奔西走したほか、吉野川の水運などに関する建白を行っており、それらについてしばしば森は報告を受けていた（武岡編 1917 参照）。森自身が政治・社会上の問題をめぐる直接的な活動を行ったかどうかは定かでないが¹⁴⁾、森の学舎も五條も、時勢に対する強い関心と問題意識を持ちながら漢学を学ぶ空間となっていたのである。

さて、陸奥と五條との関わりについては、逸話としては早くから知られていた。すなわち、陸奥の生前に刊行された渡邊脩二郎（1897：7-8）に、次のような記述がある。「初め陸奥の父が罪を獲て禁錮せらるるや、陸奥は尚ほ幼稚なりしと雖も、之を冤として怨を報いんと欲し、其手段を考ふるに、藩地に接せる大和の五條は官領なるを以て、此地の代官とならば、藩の執政等に抗して其望を達することを得べしと。此事を按出してより独り自ら喜び、代官となるの準備として、地方凡例録、落穂集等を閲読し、収税の方法、検見の規程等を査究したり」。

阪崎（1898：10-11）は内容が若干違って、父宗広の失脚後、憤って復讐を叫ぶ若き日の陸奥を見た書肆の主人が天領の代官になることを勧め、喜んだ陸奥は五條の老吏のもとで食客となって地方凡例録や落穂集を読み算術を学んだ、となっている。こちらの記述の方が一般的には有名であり、引用、言及

14) 「森鉄之助履歴」（「品川弥二郎関係文書」1524）は、「天下有志の士と相交り、専ら尊攘の主義を唱道し以て国家の為め尽す所あらんことを期せり」、「幕府及び旧領主植村候に建白を為したる等の事蹟あるも今詳なることを知り得す」などと記している。

されることも多い。

もっとも、長年、そのような逸話があるという以上のことはわかっていなかったが、その状況を変化させたのが、『九度山町史』編纂のための資料調査であった。前述の通り、陸奥を含め伊達宗興ら一行は紀ノ川上流を転々とした末に入郷村で暮らし、庄屋の玉置家に住まいを提供してもらったほか、そのすぐ近くに住む、高野山の荘官の家系である岡家に世話になった。町史編纂の調査の過程で、その岡家に、宗興や陸奥から送られた書簡が残されていることがわかったのである¹⁵⁾。そしてこの調査に加わっていた北山直大氏が私家版の論文を書き、萩原 (1997a) がそれに依拠して論じたことで、陸奥と五條、そして森鉄之助の関係性が、裏づけを持ったかたちで知られるようになった。

萩原 (1997a : 92-93) は、まず上述の阪崎 (1898) の記述を示し、発見された伊達宗興の手紙に仲次郎という本屋の出入りがあったと記されている、とする。そして、陸奥が岡家の長男の熊太郎に送った年賀状に出てくる「森先生」が、主善館教授の森鉄之進 (ママ) であるという北山説を紹介し、阪崎 (1898) の五條の老吏とは森のことではないか、と論じた¹⁶⁾。岡家の文書の紹介とそれに基づく陸奥と五條との関係の考察は、萩原 (1997a) のほか、和歌山市立博物館編 (1997)、九度山町史編纂委員会編 (2003)、同 (2009) でなされている。

その他、陸奥自身が「就森某之門学焉」と、森のもとで学んだと記している書き付けもある。伊達・陸奥一族の様々な書簡をまとめた巻物（「陸奥宗光及同一族自筆書簡」）に収められているものである。「陸奥宗光及同一族自筆書簡」自体は萩原 (1997a) などでも利用されているのだが、陸奥と五條・森と

15) 岡家においてもそうした重要な書簡が残されているとは知らず、町史編纂のための調査によって発見されたとのことであった (2018 年 2 月 21 日、岡勝重氏談。筆者聞き取り)。

16) 萩原 (1997a) は阪崎 (1898) で言うところの五條の書肆として仲次郎の名を挙げているようだがこれはおそらく違っており (佐々木 2018a 参照)、また、森の名前も誤って記載されている。同じく北山論文に依拠した和歌山市立博物館編 (1997 : 74) では、正しく、「主善館教授森鉄之助」と書かれている。

の関わりを示す手紙や書き付け類は、巻物の後ろの方に収められていることもあってか、管見の限り、これまで紹介されていない。なお、「品川弥二郎関係文書」所収の「森鉄之助履歴」にも、「門生中著名なるものは陸奥宗光、乾十郎、井沢宜庵、林久八郎」との記述があり、こちらは最近になって土屋、佐々木（2017）が全文を掲載している。

ただ、萩原（1997a）や土屋、佐々木（2017）で触れられていないのが、岡家と北厚治との関係である。北は大和宇智郡御山村の豪農で、森田節齋をはじめ、幕末の多くの志士や思想家と親交を結んだ。北の碑文に、「従竹亭森氏、尤有所得」とあるように（奈良県庁編 1909：713）、森に学んでいた一人だった。同時に、節齋とも連絡をとりながら森の五條での講師就任に向けて周旋を行うなど、生活の苦しい森が学問で身を立てられるよう尽力していた¹⁷⁾。

その北厚治は、分家して北姓を名乗っていたが、御山村の新田家の出である。そして陸奥らが入郷村で世話になった岡家当主の左仲の父英治は、新田家から婿養子として岡家に入っているの、岡家と北厚治は親戚であった¹⁸⁾。陸奥は、前述の通り橋本の一色宗介から五條や森について聞いていた可能性などはあるが、森のもとで学ぶようになった契機としては、岡家と北厚治の縁が最も重要だったと思われる。後年江戸に出た陸奥が岡家の息子の熊太郎に送った書状には、「北厚治様」や「森先生」への伝言、取り次ぎを頼む旨が書かれている（和歌山市立博物館編 1997：11）。

(3) 安井息軒（1799-1876）

前述の通り、入郷の岡家が高野山の荘官の家系という縁があり、安政5

17) 10月27日（年不明）、北宛谷三山書簡（奈良県高市郡教育会編 1917：130）参照。

18) 岡家系譜（『岡家文書』所収）。岡英治は、御山村の新田五左衛門の次男で、幼くして父母を亡くした後、伯父の民右衛門に養われた。国立史料館編（1988：105）に記載されている新田家の系図によると、北厚治は、新田民右衛門の子である。北と岡家が親戚であることは、既に九度山町史編纂委員会編（2003）、同（2009）が記している。ただ北について、九度山町史編纂委員会編（2003：975）は「左仲の兄」、同（2009：515）は「左仲の従兄弟」としている。

(1858) 年、陸奥は高野山江戸在番所の寺男として江戸に出てきたとされる。それからの陸奥の生活について、渡邊脩二郎 (1897: 5) は、「江戸に至りて中村小次郎と称す (後に又姓を岸野と改む)。最も窮困を極め、筆耕等の業を以て僅に口を糊すること三年、漢籍を学ばんと欲して安井息軒の門に入り、又水本成美の塾に入る」と記す。典拠とされることが多い陸奥の「小伝」(陸奥編 1929: 749-775) や阪崎 (1898) も、中村小次郎と名乗り、息軒や水本に学んだ、というところは共通している。

安井息軒は寛政 11 (1799) 年、日向飫肥伊東家に仕え、近隣の子弟に学問を教える父滄洲のもとに生まれる。文政 3 (1820) 年、篠崎小竹の門をたたき、いったん帰国した後、江戸に出て古賀侗庵、松崎慊堂のもとで学び、また昌平黌 (昌平坂学問所) に入った。帰国してしばらく教育に当たった末、天保 9 (1838) 年、江戸に移住し私塾の三計塾を開いた。門下からは谷干城をはじめ、明治政府で要職を務めることになる人物を何人も輩出した。その間、水戸の藤田東湖と親交を持ち、対外問題を中心とする時局対応につき、徳川斉昭に繰り返し意見書を提出している。塩谷岩陰、芳野金陵とともにいわゆる文久三博士の一人として、文久 2 年 12 月 (1863 年 1 月)、昌平黌儒官に任じられた (若山 1913、黒江 1953、町田 2016)。

陸奥が安井息軒のもとで学んだことは、前述の通り多くの評伝・略伝が記している。またこれは真偽不明だが、伊藤 (1911: 28-31) は、息軒のもとで学んでいた陸奥は吉原通いなどの不行跡を知られ、退塾を命じられたとする。息軒の記録によると、陸奥、すなわち当時で言うところの中村小次郎は、文久 2 年 2 月に三計塾の門をたたいたようである (若山 1913: 167)。

息軒が陸奥に与えた思想的影響について論じた古賀勝次郎 (2013) は、息軒は、徂徠の功利主義的傾向を受け継ぎ、かつ『管子』を重視し、儒家思想と法家思想を統合したと位置づける。そして陸奥は『管子』を介して西洋の立憲思想を受け入れたとし、そこに息軒の影響があったとする。

山口 (2017) は、息軒の父滄洲が徂徠学に傾倒しており、それが息軒に少なからぬ影響を与えたとする。そして、息軒における奢侈と貨幣経済の進行へ

の懸念、商業抑制論について、徂徠の『政談』との共通性を指摘する。この点は、紀州の金融・財政を取りしきる父、伊達宗広のもとに生まれた陸奥は、初めから賛同も共感もできなかったところだろう。

陸奥がどのくらいの期間、三計塾におり、またどれほど熱心に学んだかは不明だが、三計塾の学風は、たしかに陸奥が関心を寄せそうなものだった。学規に「孔門に四科之目あり、人才の長短は君父も不能強候、各其長所を致成就、他日国之用に供候儀、学問之主意に候」、「新古之学風各任其所好候」とあり(若山 1913 : 52)、「凡隊中修業分課、政法、火技、航海、汽機、語学等の如き、其志に随て執之。互に相勉励、敢て或は懈ること勿れ」(宮地 2003 : 585-586)という、後に陸奥が属する海援隊の約規とも相通ずる部分があるように思われる。谷干城は、塾生同士で行う内会は「議論縦横、往々強て異説を主張する者あり」とし、また息軒と塾生との関係性について次のように述べている。「生徒の智力を活用して古人未言の説を立つる、大に賞賛する処にして、其是非の如きは博引広証して明了に解き示さるれば、弟子皆競て己れの智力を究め、又敢て古人の糟粕に安んぜず。〔中略〕当時の諸家の如く古説の是非を問はず雷同し、又師説に議論するを悪むか如き狭隘なる事絶てなし。先生の講義と雖、其意に充たさる処は反覆質疑すれば、吾を啓く者なりとて大に喜び賜へり」(島内編 1912 : 28)。

なお、江戸に出た伊達宗興の岡左仲宛書簡に、「小二郎儀も無事に聖堂に而勉強仕罷在候」、岡熊太郎宛陸奥書簡に、「小生義、当時者聖堂入塾仕、無事勤学罷在候」とある(和歌山市立博物館編 1997 : 10-11)。萩原(1997a : 103-104)は、「聖堂」とは湯島聖堂、すなわち昌平坂学問所のことであり、「幕府の学問所である昌平黌に入塾し、勉学にいそしんでいたこともあきらかになった」としている。ただ、「書生寮姓名簿」には伊達ないし中村小次郎の名はない(関山、橋本編 1999 参照)。別の名を使ったのか、あるいは異なる形態で「入塾」したのか、また息軒のもとで学ぶことになる経緯といかなる関係にあるのか、いずれもはっきりしない。

(4) 水本成美 (1831-1884)

水本成美 (樹堂) は天保 2 (1831) 年、江戸に生まれ、儒者の西島蘭溪や松崎慊堂のもとで、また昌平黌で学んだ。江戸で家塾を開き教えていたが、文久 3 (1863) 年、薩摩に召し抱えられ鹿児島に渡る。明治に入り、議政官史官、昌平学校教授、大博士となり、刑部大判事として新律綱領編纂に携わったほか、元老院議官や参事院議官を歴任している (重野 1926 : 1-3、手塚 1944)。陸奥とは、元老院議官の時代に同僚ということになる。あまり知られた人物ではないが、後年、清浦奎吾は水本について、「有徳の君子で私が師父の如く尊敬して教を受けた人」と述べ、太政官小書記官時代に当時元老院議官だった水本から短気を戒められた話を紹介している¹⁹⁾。

昌平黌及び鹿児島で同窓・同僚であった重野安繹 (成斎) と親しく、水本の墓碑銘も重野によるものである。嘉永 6 (1853) 年 9 月には、ペリー来航に触発され、水本、重野、そして同じく昌平黌同窓の岡千仞 (鹿門) の三人で、東京湾沿いとその周辺の地を旅した。おそらく濃淡はあったものの、昌平黌書生寮の者たちの国事への関心は強く、盛んに議論を交わしていた²⁰⁾。

陸奥と水本との関わりについて、前述の通り多くの評伝・略伝が、安井息軒に加えて水本成美のもとで学んだとしている。それ以上の直接的な史料は知られていないが、明治初年を中心に陸奥と親しく接していた大江卓は、陸奥が水本のもとで学んでいた頃のこととして、具体的な逸話を語っている。すなわち、「陸奥が在京中に、まだほんの書生で水野〔ママ〕成美といふ本所の儒者の門に学んでいたことがあつた。水野〔ママ〕といふ人は大審院の判事をしていた人であつた。ある時陸奥が病気をして治療をしている時のことである。その頃は今のやうに立派な病院といふものが別にある訳でないので、医者宅で養生をしておつたのである。すると恰度その医者宅に治療に来ていた女があつた。

19) 「官途上の四恩 (上) 清浦子爵談」(『東京朝日』1922 年 5 月 30 日朝刊)。

20) 岡編 (1882)、森ほか編 (1979 : 24-30)。後者は岡の「在臆話記」を収録したものの、岡自身が政治的実践に傾斜していった人物であり、書生寮内外の雰囲気を実態以上に騒然と描かれているように見える。

狭い家の事ではあるし、朝晩顔を合はせるので、その中直ぐに知り合になつて見ると此の女は深川の芸者で香川といふ女であるこ〔ママ〕が分つた。陸奥よりは年長者でもあるし、身が浮川竹の苦勞人であるからに、よく陸奥を可愛がつてチャホヤしたものと見える。その中に両方とも好い仲になつて、病気の方は何時の間にか快くなつた。後に香川は吉原に移つて稲本楼に務めてをつた。其の頃自分もよく陸奥と一所に遊びに行つた」という。その後、神奈川県権令時代に偶然、再び香川と関わり合いになることがあつた話もしている²¹⁾。また大江は、「陸奥宗光が水野〔ママ〕の塾に書生をしている時に、鍛冶屋橋屋敷で〔山内〕容堂に逢つたことがあるといつて、却々磊落に人に逢つたものぢやヨと話していたことがあつた」というところでも水本の塾に言及している（雑賀 1926：831、836-838）。

(5) 広瀬元恭（1821-1870）

文久3（1863）年、前年に脱藩して尊皇攘夷活動に携わり、かつ紀州付家老の水野忠央と安藤直裕を糾弾する書を幕府に提出した陸奥の義兄、伊達宗興は差し当たり赦されて帰藩し、紀州の担当者として京で活動した。その頃陸奥は、勝海舟の私塾や神戸海軍操練所に属すとともに、広瀬元恭の塾、時習堂に出入りしていた。門人帳には、紀藩の伊達小次郎として、文久癸亥仲冬念四、つまり文久3年11月24日の入門と書かれている（青木 1978：10）。

広瀬元恭は文政4（1821）年、医師（儒医）の子として甲斐で生まれる。甲斐で儒者の松井渙齋に学び、天保6（1835）年に江戸に出て、緒方洪庵らを輩出した坪井信道（誠軒）の蘭学塾、日習堂に入った。天保15（1844）年、京都で蘭学塾の時習堂を開く。同時に医業も行っている。日本に本格的に種痘が広まり始めた嘉永2（1849）年、早くも11月に『新訂牛痘奇法』（あるいは『新訂痘種奇法』）を刊行するなど、多くの著書・訳書を執筆した。医学や理学、

21) 陸奥が医者のもとにいたときに遊女と親しくなったという話は、伊藤（1911）にもある。

語学だけでなく、兵学や砲術の知見も持っており、京都山崎の砲台建設にも携わった (佐藤 1987)。

代表的な門人としては、佐野常民や、数々の発明品で知られる田中久重がいる。陸奥と関わる場所では、最初期の弘化元 (1844) 年冬、大和五條の井沢の名が門人録にある (青木 1978 : 4)。森鉄之助門下の医師で天誅組の変に参加した井沢宜庵のことである。また紀州和歌山の「岩橋応輔」が安政 2 (1855) 年 3 月の入門と記されている (青木 1978 : 7)。岩橋徹輔ないし徹輔は、藩を抜けた伊達宗興の後を追ひ、宗興の藩復帰後はともに諸藩との折衝に当たった人物である。「岩橋応輔」は、岩橋徹輔と同一人物か兄弟だろう。

広瀬の塾において陸奥が何を学んだかについて、具体的な資料や逸話はない。陸奥研究ではそもそも、渡邊幾治郎 (1934) や萩原 (1997a) のように先行研究や諸資料を博捜して書かれた評伝においても、広瀬の塾に入門していたことが触れられていない。文久 3 (1863) 年からの陸奥は、坂本龍馬と出会い、勝の塾や神戸海軍操練所に通ひ、長崎で社中 (亀山社中)、海援隊の一員へ、ということになっている。ただ、これは最終的に慶応 3 (1867) 年に海援隊で大きな役割を担うことになった事実から逆算するようにつくられた話である (佐々木 2018a)。

実際には、陸奥はまだ、政治的实践に身を投じるというよりは、時勢に関心を持ちながらそれと深く関わる様々な知識を得ているところだった。陸奥が京都・大阪・神戸方面から離れて九州に渡るのは慶応元 (1865) 年 4 月かそれ以降であり、広瀬の塾では 1 年あまりにわたって学んでいた可能性がある。語学や西洋の知見に関心を向け、西洋の本 (訳書) を読むというのは、次の長崎時代にも見られる傾向である。

(6) 何礼之 (1840-1923)

慶応元 (1865) 年、九州に渡った陸奥は、錦戸広樹という名で薩摩の者として活動した。そして、長崎で英語を教えていた何礼之 (礼之助) の塾に通っている。

何礼之については、古賀十二郎（1947）や大久保（1986）で取り上げられていたが、近年さらに研究が重ねられている²²⁾。何礼之は天保11（1840）年、長崎唐通事の家生まれ、唐通事として出仕、昇進するかたわら、中国語を介して独学で英語を学び始めた。そして安政5年12月（1859年1月）、長崎奉行所は、何を含め唐通事に英語習学を命じた。何はその後、長崎にやって来た宣教師らから本格的に英語を学び、その能力が買われて幕臣に取り立てられ、英語稽古所学頭に任じられる。元治元（1864）年には英語などを教える塾を開き、諸藩の多くの者が学んだ。何に英語を教えた人物のなかにフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck）がおり、何の塾でもフルベッキは授業を行っていた²³⁾。何の塾生としては、前島密や前田正名、芳川顕正など明治期に活躍する人物が多々名を連ねており、そこに、錦戸広樹と名乗っていた陸奥や、亀山社中・海援隊の主要メンバーである白峰駿馬もいた。陸奥は、元治2（1865）年の入塾とされている（大久保1986、村瀬2000、許2011、朱2014、吉岡2016）。

陸奥が入塾した日付は定かでないが、何家の日録によると、白峰や薩摩の前田正名は元治2年4月12日に門をたたいている。また、慶応2（1866）年3月8日の日録には、錦戸広樹が長崎に帰ってきた（「帰崎」）とある。坂本龍馬らとともに薩摩の蒸気船でやって来たもので、たしかにこの日、陸奥は長崎で降りたことがわかっている（佐々木2018a）。日録に動静が記されているというのを、100名以上いる塾生のなかでそれなりに注意を向けられる存在だったと解釈することも可能かもしれない。

陸奥と何は年齢が4歳しか違わないこともあり、明治期に入っても深く縁があった。新政府に出仕した何は、兵庫県知事の伊藤博文、兵庫県出仕の中島信

22) 大久保（1986）の初出は1978年だが、著作集収録に当たり改稿されている。

23) 「公私日録」元治元年7月2日、元治2年1月8日（「何礼之文書」リール1）。なお、その意味するところは不明ながら、『日刊世界之日本』は陸奥が亡くなったとき、葬送に集った大勢の人のなかにフルベッキの姿があったことを記している。「福堂伯送葬余聞」（『日刊世界之日本』1897年8月31日）。

行、田中光顕、そして大阪北司農局長から摂津県知事となった陸奥とともに、明治 2 (1869) 年 1 月、開国主義などを説いた「国是綱目」を作成・提出した。また、何の大阪の塾の塾頭が星亨で、陸奥が何に英語教師の推薦を求めたことで、陸奥と星は知り合う (佐々木 2018a)。

何はその後、岩倉使節団に随行し、帰国後は内務省に出仕した。元老院議員や貴族院議員も務めている。モンテスキュー (Charles Louis de Secondat, baron de La Brède et de Montesquieu) の『万法精理』(『法の精神』) やベンサム の『民法論綱』など、多くの訳書を手がけており、『民法論綱』は、日本におけるベンサム翻訳の嚆矢をなすものである。そして後述の通り、陸奥はそれらを、英語版とともに獄中で読むことになる。

なお陸奥は何の塾に通っていたのと同じ頃、イギリスの長崎領事館に勤務するラウダー (John Frederick Lowder) に英語の習得について相談し、長崎・上海間のイギリス船に乗組員として乗り込んでいた。ただ結局、幕末の時点では英語はあまり身につかなかったようである (佐々木 2018a)。

3 諸テキストの検討

(1) 「商方之愚案」

以上のような学問遍歴をたどった末、陸奥は幕末の最終盤になって、海援隊の商事担当として活発に活動する。そのきっかけとなったのが、海援隊隊長の坂本龍馬に提出した意見書、「商方之愚案」であった。意見書中に書かれたところによると、慶応 3 (1867) 年 7 月 18 日の執筆である。「商船運送之事」、「取組商売之事」、「商船より船持に運上を出せしむる事」の三つからなっており、海援隊が商取引を拡大させていく方法を論じた。

その際、西洋諸国の「同盟商方 (コンペニーコンメンス)」を引き合いに出している。組のなかで私益を求め争いが起こることも多い日本の組合と異なり、西洋の同盟商方は、「凡そ同盟の商社に於て興廃利害を共にし、公平至当の道を踏み、少しも奸曲を生ずることを得ず」という。そして、詳しいことは「商

社盟論」という訳書に書かれているとする。ただ、それは素晴らしい方法であり「商方の根本、是に過るものなし」なのだが、いま日本でにわかには採用しがたい部分もあるだろうということで、実施方法を次のように論じている。「我隊に於て取組商売をせんと欲すれば、是迄日本中に行はれ来る処の取組先又は中間問屋等の仕方に少しく潤色して組合を建つ可し」。また、船持ちが自分の船を船長に任せて運上金のみを課すスイスの例を挙げ、イギリスでもその方法を取り入れる動きがあると記した。

このように、陸奥が初めて書いた意見書は、いかにして商売を盛んに行い、利益を上げるか、ということ論じたものだった。自身の立場や属する組織と関わる課題について研究し、現実的な方策を考え出していく様子が既に見られる。西洋の実例や知見を学び、日本の現状を踏まえて適用方法を考えるという点も、同様である。

「コンペニー」と言えば、福沢諭吉は慶応2（1866）年刊の『西洋事情』において、商社ないし商人会社について記し、その写本はそれ以前から流通していた。また、幕臣の小栗忠順（小栗上野介）は同3年4月、商社の設立を建議している。それぞれ company を紹介・導入しようとする目的も説明内容も同じではなく、福沢や小栗が実際に西洋社会を見ているのに対して陸奥は基本的に本から知識を得ているという違いもあるが、いずれも、日本にはない西洋の company というものに着目した。後のベンサム受容がそうであったように、日本国内で、あるいは陸奥の周辺で、先駆的に西洋の知見を摂取する動きがあり、陸奥もそれに敏感に反応したと言えよう。

なおこの陸奥の意見書は、宇和島伊達家の文書を典拠とする岩崎編（1926a：317-324）などと、和歌山県立図書館所蔵のもので、文言や内容が一部異なる。また、岩崎編（1926b：273-280）は、文言は後者と同じだが、副言の部分がなく、9月に坂本に見せたと推定している。和歌山県立図書館所蔵の同意見書には、副言に宛名として坂本の変名である才谷梅太郎の名と、慶応3年8月という日付が入っており、こちらが正しいと思われる。

(2) 慶応 4 年 4 月辞職願

坂本龍馬が暗殺され、慶応 4 (1868) 年 1 月に新政府に出仕した陸奥は、待遇に不満を抱き、じきに辞職を考える。4 月、意見書を兼ねた辞職願を提出している。『中外新聞』に掲載されるなどして世に知られた²⁴⁾。内容としては、自分のように能力のない者が僥倖で外国事務局権判事の重職を得てしまっている、と心にもないことを書くことで、新政府において能力本位の人材登用が行われていないと訴える趣旨である。

そこで用いられている言い回しは、儒学的教養に基づくものだった。例えば、「材力に応じ、分際を論せず御擯用被成候一条は、野無遺賢の美事、最上の御政令、四海一同奉感戴候儀に御座候」というかたちで人材登用に関する明治新政府の方針を称賛してみせる。そのうえで、「不才の微身を省み候処、孔子、漆雕開をして仕へしむるに未能信の明訓有之、其上下外交際は四方に使して君命を辱めざる名士の職掌、其实なくして其任を汚し候儀、恐惶慙愧の限り、奉絶言語候」と記した。「野無遺賢」、「孔子、漆雕開をして仕へしむるに未能信の明訓」、「四方に使して君命を辱めざる」など、この時点で、国のあり方のような大きな政治上の事柄を論ずる際に陸奥がまず思い至る言葉や世界観は、儒学・漢学によるところが大きかったものと思われる。

(3) 「日本人」

陸奥は明治 2 (1869) 年にいったん政府の職を辞し、和歌山の藩政改革に関わった後、同 4 年、廃藩置県を機に神奈川県知事に転じる。そして大蔵省で地租改正などに携わり、同 7 年 1 月に再び官職を離れた。そのとき、木戸孝允に送ったのが、「日本人」という一文である。

この文章の主眼は、薩長専制批判である。「薩長の功労最も超越にして、従て其権力最も重大なり」、「官職は現時未来に対して、其職務の責任を尽すべき

24) 『中外新聞』第 25 号 (慶応 4 年閏 4 月 16 日)、土居編 (1877 : 33-35)、和歌山市立博物館編 (1997 : 25、79)。引用は『中外新聞』より。

ものなれば、之を既往の功勞に報ひるものと看做すべからず]、「今や薩長の人に非らざれば、殆ど人間に非らざる者の如し。豈歎息すべきの事に非らずや]、「薩長土肥の人々、即ち現在当路の大官に在る者は、最も相猜疑忌嫌し、就中薩長の間、外和内離にして、始終互に疑惑を抱き、是非を相異にす。故に行政上に於ても、動もすれば、各自の私意を立てんとし、或は陽に其説を同ふし、陰に其意を異にし、或は彼進むときは此退き、夫が為めに政務頗る齟齬渋滞すること多し」などという。そして結論部分で、「願くは我が全国日本人、此国に対する義務あり権利あり、其義務を尽し、其権利を達し、独り之を政府即ち薩長等の人に委せず」と論じた（陸奥編 1929：7-12）。

ただ、「日本人とは、西は薩摩の絶地より、東は奥蝦夷までの間に生育して、凡そ此帝国政府の下に支配せらるる者皆此称あり。既に此称あれば、各人其尊卑賢愚貧富強弱に拘らず、皆此国に対する義務あり権利あり」と始まる冒頭は、薩長批判の議論に結びつけるための導入部とはいえ、国家における政府と人民のあり方についての陸奥の考えが示されており興味深い。陸奥は、以下のよう

「大官は其権利最も大にして、其義務愈々重く、小官は其権利少々小にして、其義務少々軽し。平民に至りては、此権利と義務とは全く取除けられたるものの如しと雖、平民には亦自ら平民一般の権利と義務あり。其義務とは、自家の利益中より若干の歩合を政府に納め、之を税金として、政府の費用に充て、又丁年の者は、其力役に服して全国の安全を衛る等なり。其権利とは、既に此義務を尽して政府の用向を弁じたる上は、各自其生活の為め、其幸福の為め、其安寧の為め、其利益の為め、其名誉の為め、又は其他の事件に、政府又は他人より自己所有の部分に毀損せらるることあるときは、之を回復すること、又は其扶持を得むことを、政府に要求するの権あり。是れ皆即ち平時人民の政府に対する義務なり権利なり。又時としては、政府の施政上に於ても、国内人民一般の弊害となることは、之を除去し、其利益となることは、之を興立するを請求すること、或は政事向

に偏頗不公平の処分あるとき、又は政府の処分にて、此国の安全を傷害し、此国の危難を醸成すべきことあるときに於ては、之を忠告し、之を争論するの権あり。故に約まり人民も亦政府の義務と権利を分任したるものにして、其平常の政事上に於て、政府と人民との職掌に区別あるは、仮りに此国内の事務を相互に約束して、面々持前の分課を定めたる如きものなり」(陸奥編 1929 : 3-4)。

後述の通り陸奥は獄中で西洋の書物や訳書を多数読み、またそれ以前の元老院時代にも西洋の思想や著作に接する機会が少なからずあった。ただ、上に掲げた「日本人」の冒頭部分も、西洋の思想から学んだと見るのが自然だろう。そしてこれが書かれたのは、元老院時代よりも前である。その当時、陸奥は原書を読む語学力はなかったはずなので、日本語で書かれたものを読んだか、誰かから教わったと考えられる²⁵⁾。

また、「日本人」を執筆する少し前、明治 6 (1873) 年 12 月 10 日の大江卓宛書簡において、「生糸会社頭取共も何卒十分奮発有之、仮令此度は議論不被行候共、向來我か人民も権利を主張する事之端とも相成、事々物々苟も権理を屈辱さるる時は政府に対し候共、其議論を展さる事を得候へは大に向後上下之為筋と存候」と記している(渋沢青淵記念財団竜門社編 1957 : 475)。これは、外国からの圧力で生糸改会社の位置づけが見直されるという局面のものである。生糸改会社の設立は、生糸の粗製乱造対策を目的としつつ、実質的には産業保護・育成策として政府と横浜商人が進めていた。陸奥は、そこで政府が手を引くことを商人たちの権利の毀損と捉え、政府に対し権利を主張するよう促した。

25) 例えば福沢諭吉の『西洋事情』などを読み学んでいた可能性は高いが、直接的な資料を見出すことができなかった。なお、紀州と福沢・慶應義塾は縁が深く、陸奥周辺と福沢との間にも少なからずつながりがあったことは、萩原 (1997a : 317-319) で指摘されている。例えば、明治 2 (1869) 年初頭前後、陸奥の義兄の伊達宗興は福沢諭吉と往来を重ねており、『英国議事院談』は宗興に促されて刊行されたものである。ただし萩原は、福沢が陸奥に与えた思想的影響という関心からそうした事実を紹介しているわけではないようである。

「日本人」の冒頭部分で示されたのと同様の発想である。陸奥はこの時点で既に、西洋の概念を当てはめて実際の日本の政治や行政を論じていた。

(4) 「福堂独語」

明治8(1875)年、新設の立法を担う機関である元老院の議員、次いで幹事となった陸奥であったが、西南戦争の際に土佐立志社系の政府転覆計画に関与し、同11年、逮捕・投獄される。そして、山形と仙台の獄で約4年間過ごす。

陸奥とその周辺でのベンサム受容、そして陸奥の獄中生活については、既に先行研究が詳しく論じている(上野1989、萩原1997a・b)。まず、日本におけるベンサムへの関心は明治10年代に集中しており、『利学正宗』が刊行された明治16・17(1883・84)年の前後5年ほどの間に、10あまりの翻訳(部分訳を含む)が世に出ている。そしてその初めの3冊である何礼之訳『民法論綱』、林董訳『刑法論綱』、島田三郎訳『立法論綱』は、いずれも陸奥と近い関係にある人物によるものだった。

陸奥と何の関わりについては既に述べた。林董は、陸奥が和歌山藩政に関わっていた時期に知り合い、陸奥の神奈川県知事就任に伴って横浜に出てきた。後に陸奥の外務大臣時代に外務次官を務める。島田三郎は、元老院の書記官の一人である。元老院は翻訳事業を行っており、『立法論綱』も元老院蔵版である。陸奥はそれに、序文を寄せている。さらに、和歌山時代から陸奥が面倒を見ていた星亨が明治7(1874)年にイギリスに渡ってベンサムの思想に感化され、「セオリー・オブ・レジスレーション」について、「少くともこれを十遍繰返して読め、慥かに啓発の資たるべし」と言うほどであった(野沢1984:107)。星は同10年に帰国している。

陸奥は獄中で、漢籍、歴史書、西洋思想など幅広く大量の本を読み、『利学正宗』の原稿を書き上げた。また、「面壁独語」、「福堂独語」、「資治性理談」という三つの文章に、読んだ本の内容なども引きながら、自らの思想や考察を書き記している。その他、『春秋左氏伝』からの抜粋をまとめた「左氏辞令一

斑] があり、漢詩も多数つくった²⁶⁾。

「面壁独語」、「福堂独語」、「資治性理談」のうち、たしかに「面壁独語」は、ベンサムへの言及が目立つ。例えば、「利学の主義に従へば、其用語常に一定し、其意義必ず符合するを要す。故に其論理の方法も、亦自ら明白単簡にして、一目の下、其主意の在る所を指示するに足る」(陸奥編 1929: 32) といった記述などは、まさにベンサム・功利主義を高く評価し受容しているということだろう。続いて『大学』の「国不以利為利、以義為利」に触れ、「此語を直解せば、上句は下句に矛盾し、下句は上句に抵触す」とする(陸奥編 1929: 33)。ベンサムがイギリスにおいて批判の対象とした問題点を、陸奥も日本において容易に見出すことができた。

しかしながら、「福堂独語」では、直接名前が挙がっている回数で言えば、ベンサムよりもモンテスキューの方が多い。獄中の陸奥の手もとにある本のなかには、モンテスキューの *The Spirit of Laws* とそれを何礼之が訳した『万法精理』も含まれている(山形県文化財保護協会編 1954: 83)。

また、「智識の交換を論ず」という節では、次のような文章がある。

「諸自由の中、或は偶然なる弊害を流出し来ることあり。即ち此弊害とは他なし、各人の議論と思想との岐別する為めに発生するものにして、之を約言せば、社会上に新旧(若くは改進と保守)の両説并立する間に起る所の争点より出来するものなり。〔中略〕其異端若くは邪説といふ議論にして、果して世道に益なく民福を損するが如きものなれば、其首唱者は縦ひ或は執迷して永久に夫れを維持せんと欲するも、其雷同者に在りては到底其議論の利益なきことを発見し、之を抛棄するに至らずんばならず。況や他の一方には抗敵の論鋒を以て、其誤謬を指摘し、其不利を鳴らし、寸分の釁隙を窺ひ攻撃する者あるに於てをや。然れば此等の争論は十分に雙方

26) 『利学正宗』以外はいずれも、陸奥編(1929)に収められている。なお、一般に「資治性理談」は獄中の作の一つとされているが、獄中の陸奥に送られた荷物のなかに同名の書物があり、投獄以前に書かれた可能性が高い。

の自由に一任し、公衆をして自ら其曲直を判決せしむべきなり。而して此判決は結局多分に実利を含蓄する所の一方の説に左袒するものなるが故に、従ひて正当の条理を失はざるものなり」（陸奥編 1929：123-124）。

ここでミルの名は出ていないが、明らかにミルの議論を引き写したものである。そして、「人智の交換は人々交際の中に在るものとせば、其直接と間接とを問はず、必ず之を容易にするの手段を求めざるべからず」、「智識発達の機は、常に両説相軋する中間より生出するもの」とも記し、バックル（Henry Thomas Buckle）について、「蒸汽の発明即ち汽車汽船の発明を以て欧洲文明の三大原因の一に置きたるは不朽の論なり」としている（陸奥編 1929：121-122、127）。

つまり陸奥は「福堂独語」において明確に、多様性と交流、対立のなかで智が発達し、社会が進歩していくという世界観を示していた。モンテスキューだけでなく、ミルの『自由之理』やバックルの『英国開化史』、ギゾー（François Pierre Guillaume Guizot）の『欧洲開化史』（『西洋開化史』、『ヨーロッパ文明史』）は、いずれも獄中の陸奥の手もとにあった（山形県文化財保護協会編 1954：83、86）。ベンサム以外にも、明治初期の知識人たちがよく読んだ西洋の本を訳書で読み、その知見を摂取したのである。そして参照元が似通っていることもあって、例えば福沢諭吉の『文明論之概略』などしばしば記述内容が重なってくるのであった。

おわりに

幕末、10代から20代前半にかけて、陸奥は現在わかっているだけで5人ないし6人のもとで様々な学問を学んだ。順番としては、まず儒学・漢学を学び、次いで西洋の文物や学問、語学に関心を示した。ただ陸奥の場合、基礎教育としての漢学を身につけた、あるいは身につけようとしたのは確かだが、初めから、儒学やそのなかの特定の学派の思想・体系を受け入れていたようには見え

ない。陸奥は、父が失脚し、苦しい生活環境のなかで、黒船来航後に本格的に学び始めた。陸奥に教えた人物たちとその学舎も、動乱や変革の風潮から強く影響を受けていた。そうしたなかで陸奥は、揺れ動く政治や社会の現実を把握し、その行く末を考え、それに対応して大をなそうとしていた。現実の把握やそれへの即応、作為の重視といったことは徂徠学の特徴かもしれないが、陸奥は徂徠学を通じてそうした発想を得たわけではない。

幕末の時点で西洋の知見に関心を持ち、英語の習得にも意欲を見せていた陸奥が、その後さらに西洋の思想を摂取するきっかけとなったのは、元老院時代と、獄中生活である。元老院時代には、陸奥自身は原書も成果物もそれほど読み込んでいなかったかもしれないが、陸奥の周辺でベンサムを含め翻訳事業がなされた。そして獄中生活では十分な時間ができたこともあり、多くの著作を読み、思索にふけた。

ただ陸奥は、それ以前、明治 7 (1874) 年の文章、「日本人」においても、その少し前の書簡においても、国家において人民は権利と義務を有しているのであって、その権利が損なわれ、あるいは政府の措置に問題がある場合には権利を主張できる、すべきである、と論じていた。日本人が書いたものを読んだか、誰かから話を聞くことで、西洋の思想を学んでいたと考えられる。

そして獄中でも、ベンサムだけでなく、明治初期の知識人の間でよく知られていた西洋の著作を主に訳書で読み、その知見を吸収していた。そうしたなかで書かれた「福堂独語」は、明治初期政治思想の潮流が反映された一例と見ることができ、また陸奥の分析という点でも、モンテスキューやミル、バククル、ギゾーなどを含めた思想形成と捉えた方が、陸奥のその後のヨーロッパ遊学や政治的実践の理解に資するものと思われる。

※本稿は、JSPS 科研費 (16H06702) の研究成果である。

参考文献

「一色家文書」：個人蔵（橋本市図書館にて複製版を利用）

「岡家文書」：個人蔵

「何礼之文書」：マイクロフィルム版、東京大学社会科学研究所図書室所蔵

「紀州家中系譜並に親類書書上げ」：和歌山県立文書館所蔵

「品川弥二郎関係文書（その1）」：国立国会図書館憲政資料室所蔵

「商方之愚案」：和歌山県立図書館所蔵

「陸奥宗光及同一族自筆書簡」：和歌山県立図書館所蔵

青木一郎（1978）「広瀬元恭の時習堂とその門人録」（『医譚』第50号、3-12頁）

一色直太郎編（1933）『我家のゆかり』一色直太郎発行（「一色家文書」61の2）

伊藤仁太郎（1911）『陸奥宗光』東亜堂書房

岩崎英重編（1926a）『坂本龍馬関係文書 第一』日本史籍協会

———（1926b）『坂本龍馬関係文書 第二』日本史籍協会

上野隆生（1989）「自由民権期におけるイギリス功利主義思想の摂取 陸奥宗光とジェレミィ・ベンサム」（『現代史研究』第35号、35-50頁）

———（1993）「陸奥宗光講義ノート シュタインとの出会い」（『金沢文庫研究』第291号、1-15頁）

江藤淳（1977）「“利”と“義”と 陸奥宗光と星亨の場合」（『通産ジャーナル』第10巻第3号、54-60頁）

大久保利謙（1986）「幕末英学史上における何礼之 とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流」（大久保『幕末維新の洋学 大久保利謙歴史著作集5』吉川弘文館、344-367頁）

大阪狭山市史編さん委員会ほか編（2014）『大阪狭山市史』第1巻（本文編通史）、大阪狭山市役所

大月明（1981）「谷三山の尊王攘夷思想について」（『人文研究』第33巻第12分冊、48-62頁）

大伴茂（1936）『聾儒谷三山』平凡社

- 岡千仞編 (1882) 『禺于日録』 岡千仞発行
- 小沢栄一 (1966) 『近代日本史学史の研究 幕末編』 吉川弘文館
- 許海華 (2011) 「長崎唐通事何礼之の英語習得」(『関西大学東西学術研究所紀要』 第 44 輯、297-318 頁)
- 九度山町史編纂委員会編 (2003) 『改訂 九度山町史 史料編』 九度山町
- 九度山町史編纂委員会編 (2009) 『改訂 九度山町史 通史編』 九度山町
- 黒江一郎 (1953) 『安井息軒』 日向文庫刊行会
- 桑木巖翼 (1943) 『明治の哲学界』 中央公論社
- 古賀勝次郎 (2013) 「安井息軒を継ぐ人々 (五) 陸奥宗光と立憲思想」(『早稲田社会科学総合研究』 第 13 巻第 3 号、1-20 頁)
- 古賀十二郎 (1947) 『徳川時代に於ける長崎の英語研究』 九州書房
- 国立史料館編 (1988) 『史料館所蔵史料目録 第 46 集 紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目録』 国立史料館発行
- 雑賀博愛 (1926) 『大江天也伝』 大江太発行
- 阪崎斌 (1898) 『陸奥宗光』 博文館
- 佐々木雄一 (2018a) 『陸奥宗光』 中央公論新社
- (2018b) 「近代日本の代議政治と陸奥宗光 立憲政治、競争、デモクラシー」(『年報政治学』 2018-1)
- 佐藤八郎 (1987) 「広瀬元恭」(古屋直臣編『郷土史にかがやく人々』 集合編Ⅲ、青少年のための山梨県民育成会議、255-275 頁)
- 重野安繹 (1926) 『成斎先生遺稿』 卷 7、松雲堂書店
- 渋沢青淵記念財団竜門社編 (1957) 『渋沢栄一伝記資料』 第 14 巻、渋沢栄一伝記資料刊行会
- 島内登志衛編 (1912) 『谷干城遺稿』 上巻、靖獻社
- 朱鳳 (2014) 「何礼之と宣教師の交流について」(沈国威、内田慶市編著『環流する東アジアの近代新語訳語』 ユニウス、207-221 頁)
- 菅原光 (2009) 『西周の政治思想 規律・功利・信』 べりかん社
- 関山邦宏、橋本昭彦編 (1999) 『「書生寮姓名簿」・「登門録」 翻刻ならびに索

- 引』 関山邦宏発行（平成 10 年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、課題番号：08451066）
- 高瀬重雄（1942）『伊達千広 生涯と史観』 創元社
- 高世信晃（1997）「陸奥宗光の「議会政治論」 イギリス政治制度の研究から」（『国際学論集』 第 39 号、55-77 頁）
- （2001）「陸奥宗光と日本の選挙制度確立 イギリスおよびオーストリアにおける留学研究から」（黒沢文貴、斎藤聖二、櫻井良樹編『国際環境のなかの近代日本』 芙蓉書房出版、55-89 頁）
- 武岡豊太（1917）『贈正五位乾十郎事蹟考』 武岡豊太発行
- 谷山正道（2017）「幕末の社会情勢と地域知識人 大和の碩儒谷三山の言説と門弟たち」（谷山『民衆運動からみる幕末維新』 清文堂、225-263 頁）
- 土屋弘（1917）『晚晴楼文鈔』 再版、下巻、加藤鎮之助、福田信次郎発行
- 土屋紀義、佐々木研太編著（2017）『江戸時代の呂氏春秋学 山子学派と森鉄之助・新出注釈二種 解説と翻刻』 中国書店
- 手塚豊（1944）「明治法制史上に於ける水本成美」（尾佐竹猛編『明治文化の新研究』 亜細亜書房、345-365 頁）
- 土居光華編（1877）『偶評続今体名家文抄』 第 1 巻、小林新造発行
- 鳥谷部春汀（1909）『春汀全集 第 1 巻 明治人物月旦 政治家月旦』 博文館
- 奈良県高市郡教育会編（1917）『三山谷先生遺稿』 奈良県高市郡教育会
- 奈良県庁編（1909）『大和人物志』 奈良県庁
- 野沢雞一編著（1984）『星亨とその時代』 第 1 巻、川崎勝、広瀬順皓校注、平凡社
- 萩原延寿（1973）「陸奥宗光紀行」（萩原編『日本の名著 35 陸奥宗光』 中央公論社、5-52 頁）
- （1997a・b）『陸奥宗光』 上下巻、朝日新聞社
- 藤田省三（2006）『藤田省三対話集成 2』 みすず書房
- 帆足囃南次（1969）「英学史上の陸奥宗光 その位地と評価」（『立正大学教養部紀要』 第 3 号、1-10 頁）

- 町田三郎 (2016) 「安井息軒」(小宮厚、町田『松崎慊堂・安井息軒』明德出版社、133-256 頁)
- 松本三之介 (1974) 「近世における歴史叙述とその思想」(松本、小倉芳彦校注『近世史論集 日本思想大系 48』岩波書店、578-615 頁)
- 丸山真男編 (1972) 『日本の思想 6 歴史思想集』筑摩書房
- 宮地佐一郎 (2003) 『龍馬の手紙』講談社
- 宮村治雄 (2005) 『日本政治思想史 「自由」の観念を軸にして』新訂版、放送大学教育振興会
- 陸奥廣吉編 (1929) 『伯爵陸奥宗光遺稿』岩波書店
- 村瀬寿代 (2000) 「長崎におけるフルベッキの人脈」(『桃山学院大学キリスト教論集』第 36 号、63-94 頁)
- 本居清造編 (1928) 『本居全集』首巻、増補版、吉川弘文館
- 森銑三ほか編 (1979) 『隨筆百花苑』第 1 巻、中央公論社
- 山形県文化財保護協会編 (1954) 『山形獄中の陸奥宗光 獄中生活と民権思想の発達』山形県文化財保護協会
- 山口智弘 (2017) 「安井息軒の経世論 かの思想の素描として」(『日本漢文学研究』第 12 号、51-77 頁)
- 山路愛山 (1893) 『荻生徂徠』民友社
- 吉岡誠也 (2016) 「幕末開国と長崎通詞制度の課題 長崎唐通事何礼之助の制度改革案を中心に」(『論集さんせい』第 38 号、27-44 頁)
- 吉田寅次郎 (1883) 『嘉永癸丑吉田松陰遊歴日録』品川弥二郎校正、吉田庫三発行
- 若山甲蔵 (1913) 『安井息軒先生』蔵六書房
- 和歌山市立博物館編 (1997) 『'97 秋季特別展 陸奥宗光 その光と影』和歌山市教育委員会
- 渡邊幾治郎 (1934) 『陸奥宗光伝』改造社
- 渡邊脩二郎 (1897) 『評伝陸奥宗光』同文館

